滋賀医科大学看護学ジャーナル，9(1)，59-62

実践報告

高齢者を想定した基礎看護学実習前の演習効果について

―アンケートの自由記載をKJ法で分析して―

青田正子[1]　大城知恵[2]

[1]滋賀医科大学大学院医学系研究科修士課程

[2]関西看護医療大学

要旨

基礎看護学実習は、看護を学び始めた学生たちが、看護の対象との関わりを通して、看護の概念や看護の目的・役割など自らの体験として最初に会得する学びの機会である。しかし、基礎看護学実習Ⅰ，Ⅱは、机の上での学習を進めている途上の段階にある学生が対象である。今回、その様な学習準備状態で実習を控えている学生に対して、高齢者を対象とした基礎看護学実習を想定しJ.Deweyの「経験がその後の経験に効果的な影響を及ぼす」[2] 理論に基いた演習を計画した。演習を終え基礎看護学実習を修了した学生に、今後のよりよい演習を目指す目的で、半構成質問形式で自由記載を実施し、その結果をKJ法で分析した結果、1年生では「演習の意義」「想定と実際の違い」「演習への期待」2年生では「個別ケアの提供の難しさ」「情報収集と観察の難しさ」「報告や表現を鍛えたい」の合計6個のシンボルマークを得ることができた。1，2年生共に、学生は演習や実習を振り返り、結果「経験がその後の経験に効果的な効果を及ぼす」事が明らかにされた。

キーワード：リフレクション、看護学生、基礎看護学実習、演習、KJ法

Ⅰ　はじめに

日本は、欧米先進諸国と比較して高齢化率が高い。その一方で、核家族化等により、人間関係は希薄になっている。そのため臨地実習において、看護学生が受け持つ対象は高齢者が多くなると予測される。

看護基礎教育において基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱは、看護を学び始めた学生が、看護の概念や看護の目的・役割などを自らの体験として最初に会得する学びの機会である。

現行当校では基礎看護学実習Ⅰを1年生の冬季、基礎看護学実習Ⅱを2学年の冬季に設定している。老年看護学や在宅看護論など高齢者の看護については、基礎看護学実習終了後に学習する。そのため学生は、自分とは異なる世代の高齢期の対象の援助について充分にアセスメントすることが、困難な状況にあると考える。

J.Deweyは、「経験についての理論の必要性」[1] の中で、「真実の教育はすべて経験を通じて生じる信念」から、「経験がその後の経験に効果的な影響を及ぼす」[2] と述べている。そこで、臨地実習の受け持ち対象者を想定した事例（高齢者）に沿った看護過程に基づく看護技術の演習を行い学生の自主的な学習参加を促し、基礎看護実習を想定した演習と実習を経験の振り返りを分析することにした。この様な経験をした内容や意味を理解し、同様の場面での具体的な課題を明確にする思考・学習方法を「リフレクション」と言う。

本調査では、J.Deweyの「経験がその後の経験に効果的な効果を及ぼす」ことを元に、学習における振り返りを「リフレクション」と定義する。

Ⅱ　調査目的

「実習直前に演習を行うことが、臨地実習における学習にどのように影響するのか？」検討する。

Ⅲ　用語の定義

1. リフレクション（reflection）：J.Deweyの「経験がその後の経験に効果的な影響を及ぼす」[3] を踏まえ、目黒の「学習における振り返り」[4] とする。

Ⅳ　調査方法

1. 研究デザイン：因子探索型（質的）研究。
2. 実習の概要
   1) 基礎看護学教育実習Ⅰの概要
   (1) 実習期間：1年生の1月上旬の2週間。
   (2) 実習目的：対象のニーズを把握する。
   (3) 受け持ち状態：2人の学生がペアになって1人の対象者のケアを受け持つ。
   2) 当該校は3年課程の看護専門学校である。
3. 基礎看護学教育実習Ⅱの概要
   (1) 実習期間：2年生の2月上旬の2週間。
   (2) 実習目的：対象の健康問題についてアセスメントし看護を提供し看護過程の展開を実施する。
   (3) 受け持ち状態：学生が1人の対象者を受け持つ。
4. 演習の概要
   1) 事例紹介（1，2年生同じ事例）
   ８０歳代男性。要介護度３。脳梗塞後、軽い片麻痺が有り、難聴があるが、認知症はない。会話が成立し移動は車いすで移動している。現在リハビリ中で施設への入所の順番を待っている。この事例で概ねのADLを想定した。
5. 学習のレディネス
   1) 1年生は、基礎看護技術の提供と対象のニーズに沿って実施することを学習している。
   2) 2年生は、対象の健康上の問題に対して必要な看護過程について学習している。
6. 演習の内容
   事例に沿った基礎看護技術（清拭・車いす移乗・バイタルサイン・陰部洗浄・臥床患者のリネン交換）を計画した。学生の人数は、3人で割り切れないので教員が、演習のメンバーに入り対応した。対象役の学生は、対象の心身の状況を想定して発言し、援助する学生は患者の身体状況を想定して援助やコミュニケーションを図るよう演習を設定した。実習前の５日間に実習を設定し一日中、技術の項目別に演習を実施した。
7. 学習プロセス
   学生３人を１つのグループで編成し（技術の実施役、対象役、観察と補助役）役割を交代制とし、その後、学生は実施・振り返り・記録を行った。
8. 基礎看護学実習Ⅰ，Ⅱを控えた女子看護学生
   1年生20名
   2年生22名中（休学者3人を除く）19名
   合計39名
   年齢平均：26.0歳
9. 調査方法（質問項目）
   基礎看護学実習ⅠⅡ実習後、演習を実施した感想を無記名による半構成的質問用紙に回答を得た。
   1) 演習の内容や時間の適当さについて
   2) 演習と実習で違いや差を感じたかについて
   3) 演習でして欲しいと思う内容について
   4) その他
10. 分析方法
   KJ法の理論に従って記載内容を分析し、ラベルをグループ編成し、表札を作成、図解化した。分析過程では、KJ法の指導者である川喜田晶子氏のスーパーバイズを受け分析内容の信頼性と妥当性を確保した。
11. 倫理的配慮
   1) 学生には、研究の主旨と参加の自由、学生に評価に関係ないことを口頭で説明し了解を得た。
   2) 自由記載で答えたくない質問には答えなくてもよいことを事前合意した。
   3) 得られたデータは厳重に管理し、研究以外に使用しないことを約束する等の配慮を行った。

Ⅴ　結果

1)　基礎看護学Ⅰ：　回収率１００%

表1.　KJ法での分析（表札・シンボルマーク）

質問	第１段階 表札	第２段階 表札	シンボルマーク
1	・現場を想定した対象把握や記録、厳しく優しい指導が役立った。 ・演習で行ったことの意味を現場で自覚した。 ・演習の質と量をもっと充実させて欲しいと実習後に実感した。 ・もう少し演習時間が欲しかった。	**実習を経てこそわかる、充実した意義深さ。**	**演習の意義**
2	・演習とは異なり実際の高齢者はしわがあり陰部洗浄が難しかった。 ・実習では高齢者の関節の硬さに戸惑った。 ・実習での高齢者は耳が遠くコミュニケーションが難しかった。 ・演習では元気な人が患者役なので実習の高齢者はイメージが違った。 ・演習とは違って実習では創意工夫が必要である。	**対象の演習と実習との違いに現実を感じた。**	**想定と実際の違い**

3	・寝たきりの方のおむつ交換や関節の硬い高齢者の着替えの方法をもっと練習したい。 ・しわが多く、寝た状態での陰部洗浄がうまくできなかった。 ・患者さんによって動ける範囲が違うので色々な事例を演習したい。	**高齢者の様々な状況に対応できる演習をしたい。**	**演習への期待**

2)基礎看護学Ⅱ：分析　回収率１００%

表2.　KJ法での分析（表札・シンボルマーク）

質問	第１段階 表札	第２段階 表札	シンボルマーク
1	・現場での患者は想定外の動きでイメージ外であることを知った。 ・高齢者の個別ケアに直面して対応の難しさと大切さを知った。 ・事例と実際の高齢者では、対象の思いがイメージができなかった。	**実習と演習では個別ケアの方法が違う。**	**個別ケアの提供の難しさ**
2	・高齢者の状態を観察することから日常のケアが始まる。 ・自分の目で患者さんの観察を行うことの必要と責任を感じる。 ・高齢者から会話をすることと情報を取るのが大変だった。	**高齢者の情報収集や観察が大変である。**	**情報収集と観察の難しさ**
3	・演習で高齢者を想定した演習で記録をしたことが良かった。 ・実際にケアしたことを表現して報告するのが大変で練習をしたい。 ・高齢者の観察方法や記録の方法を演習したい。	**高齢者のケアの報告や記録方法を演習したい。**	**報告や表現を学びたい**

Ⅵ　考察

基礎看護学Ⅰ：1年生の分析結果について

1. シンボルマーク：演習の意義

学生は、1年生で基礎看護技術や老年看護学の履修の途上であるが、演習を経過し臨地実習を経験した後で振り返り、より良い看護の提供のための演習の意義を考えられたと言える。

2. シンボルマーク：想定と実際の違い

学習の途上にある1年生の学生には、健康な学生間の演習では高齢者のリアルな皮膚のたるみや乾燥、関節の硬さなどが解らず、実習では戸惑ったことが考えられる。高齢者は、聴力の低下や視力の低下などの感覚機能の低下や記憶力の低下から学生はコミュニケーションの取り方からも、想定だけの演習でなく、実習によって理論と実践の統合が出来ることを振り返っていると考えられる。

3. シンボルマーク：演習への期待

学内の演習とは異なり、対象も環境も臨地では変化する。対象のニーズに沿う看護技術提供を実施したいが、うまくできない自分を振り返り、事前の演習では、対象の動きに応じたより具体的な援助を学びたいと希望している。

基礎看護学Ⅱ：２年生の分析結果について

1. シンボルマーク：個別ケアの提供の難しさ

２年生は対象の健康問題について個別的なケアを提供することを目的としているが、１年生とは異なり、対象への個別的なケアの方法について振り返っている。１年生とは異なりケアに対する責任の自覚がこのような振り返りになったと考えられる。

2.　シンボルマーク：情報収集と観察の難しさ

より良いケアの実践には正確な情報をとらえてアセスメントすることが求められる。学生と高齢者は世代や年齢の乖離があり、その特性を踏まえた情報の収集や観察の方法について戸惑っていることが振り返られている。

3.　シンボルマーク：報告や表現を鍛えたい

学習課題を振り返っている。現状を見るだけではなく、学生は具体的に、報告し伝える方法を補うような演習を希望している。

以上述べてきたように臨地実習における学内演習の経験が実際の実習における学習効果につながることが示唆された。

教育の目標は、「学生が自分自身で知識を『発見』に向かっていけるように、よく錬られた指導法を使って刺激を与えるのである。教員は、学生が自分で発見出来るように枠組みを提供する」[7] ことである。そのため教員には、学生の学習行動の経験の積み重ねから、学生自身の知識の「発見」が目指せるような指導が必要である。学生の学習状況と実態を照らし合わせた十分な学習機会を提供することが教員に求められる。

今回、実習前の演習は初めての取り組みであったが、今後は、正規の課題として演習を取り入れることが効果的と考えられる。「リフレクションは、特定の状況下で

起こった出来事を説明するために１つの知識を適応したけれども、そのことを十分に説明できないという現実の状況のなかで生じた不快な感情や考えを認識することによって始まり、学習の焦点は、このような特定の実践に対する批判的分析を行うこと」[6)7)] とある。今後も、「状況のなかで生じた不快な感情や考えを認識する」ために、学生に学習機会を設置する必要がある。そのことによって、教員も学生のリフレクションを導く経験を通して共に振り返り学ぶ事が出来ると考える。

Ⅶ 結論

1. 臨地実習前の高齢者を想定した演習の経験は、学生のその後の実習の経験に効果的であった。
2. 学生は自らの経験を振り返ることで自己の学習課題を具体化することができた。
3. 学生のリフレクションを導く経験を通じて教員も振り返り学ぶ事が出来る。

本研究の限界

今回の研究は、１年限りの演習計画の実施の振り返りであり、毎年継続して結果を集積することはできなかった。又、アンケートの分析は教員の視点のみで行った。

今後は継続的に実習直前の演習を実施することや、学生の共同参加による、よりダイナミックなアンケート結果のKJ法の分析を行い、「経験がその後の経験に効果的な影響を及ぼす」理論に基づき、リフレクションを積み重ねる必要があると考える。

謝辞

本調査に協力してくださった学生の皆様に謝致します。

参考文献

1) Sarah Burns&Chris Bulman : Reflective Practice in Nursing, 2000.
2) キャスリーB,ゲイバーソン　マリリンH,オールマン:勝原　裕美子；臨地実習のストラテジー,　医学書院,2002.
3) KathleeB. Gaberson&Marilyn H.Oermann Edition ,110-111,2006.
4) 川喜田二郎：発想法,中央新書,2003.
5) 川喜田二郎：続発想法,中央新書,2004.
6) 川喜田喜美子:川喜田二郎の仕事と自画像ミネルヴァ書房,2010.
7) 舟島　なおみ:質的研究への挑戦,医学書院,1999.
8) 清水裕子：看護学生の老年者との対話の問題と特徴,日本老年看護学会誌,vol,11,2007.
9) 渡辺知佳子：基礎看護学実習Ⅱを体験した学生の初めての学び,東邦大学医学部看護学科紀要,第21号,2007.
10) 黒田裕子；看護研究Step by Step第３版,学研出版,2006.
11) ホロウエイ・ウイラー：野口美和子監訳,ナースのための質的研究入門,医学書院,2000.

引用文献

1),2) J.Dewey :Experience and Education ,The Macmillan Company,1938.　市村尚久監訳;「経験と教育」, 34,講談社学術文庫,2004.
3) J.Dewey : How We Think,11 ,Henry Regency,1933.
4) 目黒悟:「看護教育を拓く授業　リフレクション　教える人の学びと成長」, 11,メヂカルフレンド社,2010.
5,7) KathleeB. Gaberson&Marilyn H.Oermann Edition, 110-111 ,2006 .
6)Sarah Burns&Chris Bulman:看護における反省的実践田村由美ほか監訳;5-6,ゆみる出版,2000.